

六家集

壬二上

家隆卿

太政官文庫				和
		七	八	書
		六	四	門
一	八	二	九	
冊	架	函	號	

內閣文庫				和
		七	八	書
		六	四	類
三	一	八		
三	一			
兩	口	冊	架	

內閣文庫			
番號	和	7864	
冊數	18	(	6)
函號	263	29	



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM Kodak



教部省
文庫印



三

初

從二位 宮内
家隆卿傳

故薩中納言太宰權師藤原光隆二子
母故太皇太后宮權亮實兼朝臣

安元二年正月五日叙位女御璵子給于時雅隆後日改名二年正月晦日任侍從治承四年正月廿八日阿波介壽永二年正月七日從五位上 文治元十二年九月兼越中守 建久四年正月廿九正五位下 九年正月亦日上總介 建仁元年正月六從四位下 皇后宮 御給 八月一日服解 十二月廿二日復任元久二年正月五日叙從四位上 皇后宮 御給 三年正月十三日宮内門建永二年正月五日正四位下 建保四正五位從二位 宮内門 兼久二三年正三位 上卿 叙之 嘉禎元年九十從二位 嘉禎二年十二月廿二日依病出家 七十九才 法名佛生 同三年四月九日薨 八十才

壬二集上

百有 六百番奇合

百有 千八百番奇合

百有 堀門院百有

百有 八修心四葉

百有 文治三年

百有 同土月

志賀山紙

此山花は移し給ふべきなりと云ふれ山紙

二月三日

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

随

石水九巻りきくふれと云ふ随分きのき

残る

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

夏

新樹

石水九巻りきくふれと云ふ随分きのき

夏草

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

夏草

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

移し

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

夏草

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

夏草

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

夏草

いふにきくもこれに地はむ好まぬと云ふなり

夏草

情をよめりてはたふすまの海にほろけり夕顔がれ

夕顔

夕顔のつらきしきはなれど人へそふりきりて

源

新道子もこれゆへにふりてふ事なかりきりて

秋

張暑

秋のふりてはたふすまの海にほろけり夕顔がれ

夕顔

夕顔のつらきしきはなれど人へそふりきりて

源

新道子もこれゆへにふりてふ事なかりきりて

秋

秋のふりてはたふすまの海にほろけり夕顔がれ

源

新道子もこれゆへにふりてふ事なかりきりて

秋

秋のふりてはたふすまの海にほろけり夕顔がれ

源

新道子もこれゆへにふりてふ事なかりきりて

秋

秋のふりてはたふすまの海にほろけり夕顔がれ

源

新道子もこれゆへにふりてふ事なかりきりて

秋

秋のふりてはたふすまの海にほろけり夕顔がれ

唐風也

此詩乃... 唐風也

作

秋風... 唐風也

九月九日

無... 唐風也

秋霜

い... 唐風也

言秋

言... 唐風也

冬

唐風

本... 唐風也

強菊

花... 唐風也

枯野

唐... 唐風也

雲

冬... 唐風也

野の草

流... 唐風也

冬朝

註

寄海彦

よき海彦の信をよみてくるとはたしめておぼやかし
事何ぞ

いかにあはれ涙を流してくるとは神にあらはれ
事何ぞ

人よりの恨をあらはれしとて神にあらはれ
事何ぞ

うゝふや海彦のうゝふの光をあらはれしとて
事何ぞ

秋風よあはれ海彦のうゝふの光をあらはれし
事何ぞ

とて海彦のうゝふの光をあらはれしとて
事何ぞ

寄島彦

いかにあはれ島彦のうゝふの光をあらはれし
事何ぞ

口をあらはれ島彦のうゝふの光をあらはれし
事何ぞ

友にあらはれ島彦のうゝふの光をあらはれし
事何ぞ

ふかにあらはれ島彦のうゝふの光をあらはれし
事何ぞ

いかにあはれ島彦のうゝふの光をあらはれし
事何ぞ

とて島彦のうゝふの光をあらはれしとて
事何ぞ

寄公以丞

以之於世此紙返乃世之利權也

壽席迄

ひりねの造橋のくわ海神とて

寄梅山

此乃一書也

寄傀儡宅

[illegible]

寄海士

やういふひるより夜半とみぬ神

寄樵史

山人乃悔其處とせりすもわろぬ歎そと云ひしなり

寄廣人

一、凡欲求道者，必先求其心。心者，道之根也。心正則身正，身正則道成。故曰：心者，道之宗也。

小石百香餅

王升之

市の武山乃白宮乃也

まゝうてふに山乃て庭をめぐりたるのそ

山崎のふれろのりけいしをきくやうな聲がきこ

春見あきとしとけ 朝水 花を多く 根芥つらん

子日予有年矣天下無
一樂也

萬々々々々々々々々々々々

[illegible]

[illegible]

すれはたのれなまをきくみ

卷一

海に下りて舟に乗りて山をまき果て海に下りて舟に乗りて
 八月は氷にゆくまはるるわすけの海に下りて舟に乗りて
 うくまの氷代とてけり夢を君の二葉にけりて
 うらけはるけりて同郭の人海に下りて舟に乗りて
 うらけはるけりて同郭の人海に下りて舟に乗りて

新海より月桂苑より花福より秋風よりわく
 何よりともさそれよりわく郭より志は月桂苑よりわく
 一丁よりわくそれより郭よりわくよりわくわくわく
 一丁よりわくそれより郭よりわくよりわくわくわく

何れも彼をけりからんをてきりし物ありけり
けりきりし物ありけりきりし物ありけり
きりきりし物ありけりきりし物ありけり
きりきりし物ありけりきりし物ありけり

祝

四井海乃岐代如南てきりし物ありけり
きりきりし物ありけりきりし物ありけり
きりきりし物ありけりきりし物ありけり
きりきりし物ありけりきりし物ありけり
きりきりし物ありけりきりし物ありけり

百箇の歌

もろの歌

もろの歌

もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌

もろの歌

もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌

もろの歌

もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌

もろの歌

もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌

もろの歌

もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌
もろの歌

子向中何名氏成城子嘉慶

後、即ち「てん」と云ふ事を知りし由なり。

[illegible]

一箇ふくのせきつみおきて嘉永五年

[illegible]

水戸藩の志士
 水戸藩の志士

わ
ら
み
か
る
は
る
に
は
は
る
の
は
る

ふみひのひりる事なりたてあはれに思はる

吾れ氷松の舟のまへて人よりぬきて

山子水籬小異菡荷柳水之區

秋城詩人更事之乃又編之於其墓外

予之自入蜀以來天下治平之象已見

十一

首

此
糸
く
久
う
ほ
ろ
苺
も
丁
乙
富
き
う
保
み
し

欽定

門外之山吹多可也

李中

於今之世乃此海乃古之海

葦十文

文叔

師方其來未乃爲成列了
 此後と云ふこと

知

卯
部
取
口
一
結
々
々
々
人
月
快
之
心
之
悔
々

家

しきりく人跡代ふくむくつたふくふくふくふくふくふく

歌

備へり
 此とて六部とて
 逐建の所のとて

葛白朮

ひつぎのうゑにわが女も母も若くは

早花

松山田舎の面影のさびしさを
想ひて

身

はすちやうど此の新しき芝居やゐるの

又子反每

[illegible]

盧樸

壬正

夏の夜に月を眺めたりとて
螢

夕陽の影にやうに
蚊遣火

るや火の影にやうに
蓮

けしき地獄にやうに
氷室

氷室の山にやうに
泉

月に照りしれ
是れ和歌

みづさすの川にやうに
秋の月

秋の月
秋の月

秋の月
秋の月

秋の月
秋の月

秋の月
秋の月

秋の月
秋の月

秋の月
秋の月

新道

長くわたりてつらき世なりとて思ふも心

蘭

悔らるる世なりとて思ふも心

新

たふれぬ世なりとて思ふも心

唐

かゝる世なりとて思ふも心

年

ふたつた世なりとて思ふも心

新

かゝる世なりとて思ふも心

新

りやうしむ世なりとて思ふも心

権

ふたつた世なりとて思ふも心

新

かゝる世なりとて思ふも心

月

新りやうしむ世なりとて思ふも心

新

本懐の世なりとて思ふも心

新

かゝる世なりとて思ふも心

菊
 ころろん文もさうくち神も我も知れ白菊
 ね葉
 時ぬりなうけし面山積あつ秋代とてさ
 九月盡
 けつのも秋代とてさうねるあつた文も
 みすみそ
 秋也
 うりさゝみさめをあらうさう木葉新久の時ぬり
 時ぬ
 秋田山時ぬりさうくちりも秋代とてさ
 ね

秋田よりいしり代はあつたあつた秋代とてさ
 秋
 れうさうけし秋代とてさうねるあつた文も
 雪
 かけさめちりさうくちりも秋代とてさ
 雪
 小氷さうみさめちりさうくちりも秋代とてさ
 午馬
 ころろくちりさうくちりも秋代とてさ
 氷
 ぬくちりさうくちりも秋代とてさ
 水

あつてのうやうかんへ毛ふり
細代

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

あつてのうやうかんへ毛ふり
袖ふ

卅

朝



片魚

眼

卷之四

曠

杞

44

著

第

山

17

昔より人にいふは世にたれもあらず

野 町あり世にたれものゝきりて月をあらはに

実 月をいふは世にたれものゝきりて月をあらはに

海 海あり世にたれものゝきりて月をあらはに

海 海あり世にたれものゝきりて月をあらはに

海 海あり世にたれものゝきりて月をあらはに

思ふは世にたれものゝきりて月をあらはに

山家

思ふは世にたれものゝきりて月をあらはに

田家

思ふは世にたれものゝきりて月をあらはに

懷舊

思ふは世にたれものゝきりて月をあらはに

五言

思ふは世にたれものゝきりて月をあらはに

五言

思ふは世にたれものゝきりて月をあらはに

五言

三十一

三十二

全

祝

[illegible]

百首和歌

大悟正心章句首

神紙

春暑秋冬

自慙之

新組
たぬらうらうらあーい 移りやいしれ川民の後の
とてめえあつゝ山姥わうく々々かみひとまき
うっせいの向う人ちあさみふされおまううけ
あなへ山のけいの物たりげさすゝゝゝ音の

月

いりつゝはきりぎりすきりぎりす

[illegible]

風

[illegible]

兩

[illegible]

人珠 此珠初名も珠はゆきさくま珠也

暁 暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也

胡

暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也

暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也

水

暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也

山

暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也
暁の初はゆきま珠はゆきま珠也

元康元年九月廿二日郭公明之弟不孝侯侯之弟
 秋の田にふちりてふれふれとふれふれとふれふれと
 くらけりふれふれとふれふれとふれふれとふれふれと

四

一、山乃ち此より田より一、去りや田より
 山より田より此より一、去りや田より
 一、山乃ち此より田より一、去りや田より
 一、山乃ち此より田より一、去りや田より

松

とうとうとこれと梅はうらやまをもちうさなれども
 にはささくも秋もくまはうらやまをもちうさなれども
 やうやうと菊はうらやまをもちうさなれども

[illegible]

杜

[illegible]

草

まはれぬのふれりふも縁をゆめは世より来れぬ
せき根の入らぬやめなればいそげえしに
くさねれぬは心のあはれなりとありてふおれん
みよふといふうけられぬる人の心もえ

٢

止止

まればはくつといふはつとておぼやかくおもはれり
 あつた物よわらふといふはつとておぼやかくおもはれり
 不夜のころはつとておぼやかくおもはれり
 世のつとておぼやかくおもはれり

祝

はるのつとておぼやかくおもはれり
 みる月のつとておぼやかくおもはれり
 夏はつとておぼやかくおもはれり
 秋はつとておぼやかくおもはれり
 冬はつとておぼやかくおもはれり

山家

世のつとておぼやかくおもはれり
 うさわのつとておぼやかくおもはれり

歌

はるのつとておぼやかくおもはれり
 ひるのつとておぼやかくおもはれり
 秋のつとておぼやかくおもはれり
 冬はつとておぼやかくおもはれり

色

はるのつとておぼやかくおもはれり
 ひるのつとておぼやかくおもはれり
 秋のつとておぼやかくおもはれり
 冬はつとておぼやかくおもはれり

述懷

あふくたれしよふもまはれはれれをうけいふ
白雲と海とみだれをいふとふとふとふと
信じては秋の風ありていふとふとふとふと
つる風とふとふとふとふとふとふとふと
釈教

無量無數劫 聞是法亦難

あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
若くは夢中 但見妙事

常在靈鷲山

あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
就靈山に候ふまはれはれをうけいふ

引摺深妙海

あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
海ありて深妙なり

詠石首和歌

文治三年 合院入集

玄十六首

あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
けふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ
あふくたれしよふもまはれはれをうけいふ

[illegible][illegible]

浪青原秋風よりぬき交いりよ山此るらん
 ねに
 おれくはれ秋よりそとの市へおれそき築るる也
 高きよりおれぬき通れよめ高き難れおれそより也
 くれあつるもねにちか感えそえ高きよりゆく世にそく

わさふやうきふあまのまづひはれぬとすはけふけり
 ひめみ人代ひまふくしきとては袖を袖にぬき
 いふと人代ひまふくしきとては袖を袖にぬき
 我をひまふくしきとては袖を袖にぬき
 ちとくまひのやうきふ人代ひまふくしき
 みまふくしきとては袖を袖にぬき
 りりやわさふはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 子代

寄名取

うけゆ人代ひまふくしきとては袖を袖にぬき
 りりやわさふはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 我をひまふくしきとては袖を袖にぬき
 りりやわさふはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき

四つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 七つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 十つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 十三つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 十六つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 十九つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 二十二つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 二十五つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 二十八つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 三十一つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 三十四つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 三十七つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 四十つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 四十三つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 四十六つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 四十九つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 五十二つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 五十五つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 五十八つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 六十一つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 六十四つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 六十七つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 七十つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 七十三つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 七十六つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 七十九つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 八十二つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 八十五つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 八十八つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 九十一つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 九十四つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 九十七つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 一百つはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき

長衣入角

新田山やうきふあまのまづひはれぬとすはけふけり
 ちとくまひのやうきふ人代ひまふくしき
 みまふくしきとては袖を袖にぬき
 りりやわさふはれぬ袖にぬきはれぬ袖にぬき
 子代

寄文魚又

聚沙為佛塔

わらふもあやうし我々も人々也と事すゝまわりの
於来來世必得成佛

於未來世必得成佛

天賦之性清純之氣乃人花之氣也
若於夢中但見妙事

若於夢中但見外事

わさふしとて新我々子とて多しとて一とて月
其所以火燃

其所以火也

ひろしふはるゝやふり中しゆんかへし
弘誓源如海

弘治善源水

[illegible]

詠而爲壯奇

文治三年十一月

卷二十

[illegible]

卷上

五

[illegible]

神々々々々々々々々々々々

[illegible]

なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
けいさ何とて秋のふりて秋とけとみさきとさ

秋亦首

うり秋のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ

うり秋のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ
なれ安のき紙屋より池水と涼くみちの蓮花とけ

秋亦首

夕暮の空は果てぬとてさやけの風

田家

ゆふののろふは家とてさやけの風

後

さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風
さやけの風は家とてさやけの風

三集上下

二百首

百首

為家哥合

百首

勘作

百首

旧院抄政家

百首

前内大臣家内

詠二百首和評

春

立春

書本雖二百別題同有私集之次歌
建久八年七月廿九日哥也建久哥
子初哥同哥多歌略之平合院入
集哥之

春の山は花の海なりと云ふはあまのこ
子に

春の日はさくら花のめづるさきの角うさく
みゆきやうちをちるらんあはれこのけのけ

春の山は花の海なりと云ふはあまのこ

鳥

春の山は花の海なりと云ふはあまのこ
春の山は花の海なりと云ふはあまのこ

春の山は花の海なりと云ふはあまのこ
春の山は花の海なりと云ふはあまのこ

梅

春の山は花の海なりと云ふはあまのこ
春の山は花の海なりと云ふはあまのこ

梅

春の山は花の海なりと云ふはあまのこ
春の山は花の海なりと云ふはあまのこ

梅

春の山は花の海なりと云ふはあまのこ
春の山は花の海なりと云ふはあまのこ

早蕨

得

王玄

五

集

樂子為

2

くわんていせき

靈侯之弟也其弟曰
 靈侯之弟也其弟曰

胸くさけ多しそけき杜若水此の妻此日よりすも
 六月にわめあひくふよ清水よりけし今こそ杜若の

朝下、一寸おれ、此水、あゝめ、常々、自、歎、み、我、
 嘆、和、く、ま、る、言、わ、り、山、吹、た、り、う、た、た、い、あ、ま、る、え、

神而首一育顯出

地

三月盡

可成なるはあはれなる人なりと云ふは

夏

可成なるはあはれなる人なりと云ふは
のめりてあはれなりと云ふは

あはれなりと云ふは

あはれなりと云ふは

葵

あはれなりと云ふは

郭

あはれなりと云ふは

菖蒲

あはれなりと云ふは

遠久

早苗

あはれなりと云ふは

照射

あはれなりと云ふは

八月

あはれなりと云ふは

通稿

賞

致孝火

道

冰室

泉

育稷

秋

立林

扶此葉は河を渡りて秋なるを成る
又河を渡りて

七々

七々秋の東に袖をぬきて秋なるを成る

秋

ふ城に本に下るをきりて秋なるを成る

女高む

秋の神は秋なるを成る

女高むをりて秋なるを成る

秋

吹風なるをきりて秋なるを成る

有言

ふりて秋なるを成る

ふりて秋なるを成る

秋

ふりて秋なるを成る

秋

ふりて秋なるを成る

秋

ふりて秋なるを成る

秋

ふりて秋なるを成る

秋

秋

冬

初九

いそいでふくまふんとおぼたてきけりうらふ山

何處

秋れたたけのうきふらてけりふらふ山

お

新うつふをたききと吹く一は秋あすふ山

けふふれん門西面ふらふ山

霰

雪水ふりふりふりふりふりふりふりふりふり

新うらふふらふふらふふらふふらふふらふ

七

初九て山ふふふふふふふふふふふふふ

又同

雪

新うらふふらふふらふふらふふらふふらふ

言ふふらふふらふふらふふらふふらふふらふ

千鳥

月ふりふらふふらふふらふふらふふらふふらふ

おけふふらふふらふふらふふらふふらふふらふ

氷

雪ふりふらふふらふふらふふらふふらふふらふ

水色

壬上

水もたはるる所はよき所なりとある

細代

河沿いやがれ細代よりさへくさるる所なり

神ふ

所へ移るる所はたにけりておのづから

又同略

書

系物よりたれとくさるる所なり

又同略

炭電

この所はたれとくさるる所なりとある

炭電

名うらむ所はたれとくさるる所なり

又同略

炭電

名うらむ所はたれとくさるる所なり

炭

神ふ

名うらむ所はたれとくさるる所なり

炭

名うらむ所はたれとくさるる所なり

名うらむ所はたれとくさるる所なり

三十一

松

いふくはふもあはれ松のうへにふくはふもあはれ
又曰く

竹

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山人はふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

河

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

又曰く

野

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

山

山にふくはふもあはれ竹のうへにふくはふもあはれ

海

信代うへよ又打てくゝのこ松風乃て無人
同れ略く

懐

世さあう破れ海をたき海にう信代略れくえ
が

山家

いささくす懐れがく懐くそくおけりあやみえん
信代乃たりうく山家其懐吹上げえ此信代
作く山家此信代懐く懐くくくくくくくくく
田家

懐舊

りあさく懐いあし打あひさす村くく松風乃
く

壬午

ま秋代乃く若く秋代乃く月くくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくくく
信代乃くくくくくくくくくくくくくく
無常

述懐

和并れ浦や海は海く海をたけく信代略れ
税

うくあう照りく新く若く代れえうくくく
信代乃くくくくくくくくくくくくくく

春をたぐりてはるる花をさう次はさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より

春十首

うつりてはるる花をさるる花の中より
 うつりてはるる花をさるる花の中より
 うつりてはるる花をさるる花の中より
 うつりてはるる花をさるる花の中より
 うつりてはるる花をさるる花の中より
 うつりてはるる花をさるる花の中より
 うつりてはるる花をさるる花の中より
 うつりてはるる花をさるる花の中より

春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より

春十首

春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より
 春をたぐりてはるる花をさるる花の中より

若菜

春のやうな花のつゝもほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

まのけり

くろくろのしぐさのまゝはほろろとふもあいにふ

みづぬよりしらあふれぬちりきり

秋

毎火乃天候とさういふ事なくたきけり

櫓

みづ人れぬるをゆりあふれぬのちり

旅

タキ城よりしらあふれぬちりきり

秋

白雲れ秋候なり秋のちりきり

細

鳴るも秋候なりあふれぬちりきり

秋

みづぬよりしらあふれぬちりきり

秋

秋

鳴るも秋候なりあふれぬちりきり

秋

みづぬよりしらあふれぬちりきり

秋

新のちりきりあふれぬちりきり

秋

タキ城よりしらあふれぬちりきり

秋

みづぬよりしらあふれぬちりきり

秋時雨

秋のつらき夕秋のさきさき
 山に乃入花のわづらふを
 けり秋のさきさき
 けり秋のさきさき

秋の

秋のさきさき
 秋のさきさき
 秋のさきさき

秋の

秋のさきさき
 秋のさきさき
 秋のさきさき

秋の

秋のさきさき
 秋のさきさき
 秋のさきさき

秋の

秋のさきさき
 秋のさきさき
 秋のさきさき

とくは海に松川もた教ふれぬをば来り

張子為

東風吹兮竹葉飛
秋風吹兮竹葉飛

冬

結成此と爲れどもいふまでもなくわが所より

河沙

何事名之曰一室之學也

驚愕

ひさすより此巻のさうなほこりありしかるや

江水為

志くは
 蒼々如るなりやうし

寶

わくむし年のひともやうきふりていへん

急

五十九肩諸本同之

不多矣

後世に及ぶ人より亦るものなり

切近

毎とう常々そと致と礼外事わとわと来

遠矣

夕陽の影を
 照らす夕陽

閑子集

多此苦本此と延とありうとよえん合ふん

五

多岐路此
子之志也
松竹梅
為三友
此三友
也

片云

いふにけりぬるをぬるすはしる

別云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

負云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

負云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

負云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

別云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

久云

人乃成はるるをぬるふれはぬる

白雲

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

負云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

負云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

負云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

負云

ふれはぬるふれはぬるふれはぬる

片云

何忌

夢之志

報

寄家報

芳林苑

支那の雑

おのゝ報

乃之り世に於て我々を以て之を以て我々を以て

卷之四

むささぎあふ川無き好ふ波乃々々

寄拙翁

此傳之世久矣

寄張邦

[illegible]

寄本館

あまのしんめいふつれあふれしうへはきんぐそふたふ

寄茗

あひつちのいぬをさげすむな

寄水新

竹川北水みなりと云くめあふ年ほくすめん

石室和歌

洞院格必家

歌

ついでのおろくもほめれさあなりとあめのかきき
まきあふさるれけりも残れあつむれへるあめり
うくも残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
のうも残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき

歌

りうもりいさうもれ残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき

歌

郭らいつくといふ山代さあなりとあめのかきき
あめりひやう残れあふれさあなりとあめのかきき

ふれあひていりや里あはれきほけをばしらに郭と
郭とみ月とあはれ橋たもれ郭とあふりしに留す
時きさきとあひあふりなれはあふりしに留す

又月毎

又月毎とさ月とあはれとていふはあふり
ありあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ
めりてあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ
ふは海えれあはれとていふ川に海山しとささくはふ
さふ人あふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ

神秋

秋とあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ
紙袖とあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ

秋とあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ
月とあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ

月

はくくく山の山とあはれとていふはあふり
りあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ
ふは海えれあはれとていふ川に海山しとささくはふ
さふ人あふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ

お月

お月とあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ
紙袖とあふりしに留すといふ川に海山しとささくはふ

とてめこゝお栗枝に折付ぬ袖あり山姥歌乃みつゝ
わゝひさすりよとゆふ湯よりかく折れ流り此山お栗枝に
りみらゝとゆふ湯よりみれりやとて山姥歌の巻も

冰

海より北極までいそいである川を釣つたわ
物もひかるところから川は少くともふと人
さへる。それより入り組まぬところでも、水は地
方々氷の下に玉砕した花びらや、雪すゝみとか
流れていく白糸のうねり、そして、氷が溶けて

雪

山部や秋花の風光とくちたふ芳の音よあち花の
物あひて秋花とみけをばうさうやうさう

あつたれが山にやうく多きところのれうくはたか
みりともぬ人ふんきくやうく山小松るれ高れを
時ふぬいふはきといふきふれはる根れ年ふりて

丑

人女れと志のふく原はゆり 女心はうらな 移々ええ
 伯耆をれと海松の此志とええつれあふと 妾おのれに
 さね就けしあふふむといふて なれ世まへに ねえはの
 りしとてくあふ乃と我とさけあつとさうつ 神よりん
 と河みあひとふとさし水れ神れはとさうとてとるん
 不違ふ

不逢意

極少之財を此つゝひよゝうせんうの此をかり使ひたり
あふゝと云ふをさうさういふをさうさういふをさうさう

子やういふやうめんはあま山忘れ持たせよう
 新田山タタラぬ大付たみ川地よりあや待て
 いりよりいり白雲たふはるきあまはれ

山家

[illegible]

月也

物にさす末此山の景つゝさるる人々や
 彼等の心もわけて月夜さうさう山の
 大空をたそがれあすは里とあそび
 山のふもとに緑の谷ちうらやまの
 山さきより奥まで井の谷中ぬき川を流す

述懷

いひてふ世うきすうきうきいせよと祝はるゝ
多れうー我うはとそめて世よすうつ世といふ
ワうと若うとわひえてさむけ世にそほま
教へんをうめそこれうらな若ううつ病のも衣
ううた無うけよ若れりあ吹くうらうらうら
祝

祝

去秋我父之亡也此之天也乃我父之
亡也乃我父之亡也乃我父之亡也

林有夏

わさ緑のうき花柳名をきくはるかにきくはるかに

古宅郭へ

通るるをきくはるかにきくはるかにきくはるかに

市郭へ

きくはるかにきくはるかにきくはるかにきくはるかに

湖河へ

遠きうききくはるかにきくはるかにきくはるかに

舟路へ

舟路をきくはるかにきくはるかにきくはるかに

夜半の歌

くきくはるかにきくはるかにきくはるかにきくはるかに

樹陰の風

あつたきくはるかにきくはるかにきくはるかに

夜月

静夜をきくはるかにきくはるかにきくはるかに

初月夜

初月をきくはるかにきくはるかにきくはるかに

清雲

雲をきくはるかにきくはるかにきくはるかに

深山泉

深山をきくはるかにきくはるかにきくはるかに

夜後時

夜後をきくはるかにきくはるかにきくはるかに

夕暮

夕暮をきくはるかにきくはるかにきくはるかに

行海な衣

衣はしのきふとまき日くし此の衣ゆき海に
紅と納涼

堤川へ入る岸の御けつるひるあまのしり人

晩夜

なれれとちつやめさるつらういふはなみ
秋

早秋

朝ふとくぬ袖の秋外れききうはく秋らん

名あせり

度早れききぬのけううらんはなみさき川
早あせり

早あせり

このつと秋あまうらなれぬは夜けつるは

朝霧

朝ぬれ袖のききぬは山はるるはとまき川

秋窓

いさ山はれ窓のめあのはなうらうは川は

秋花

おとねも入いふは花はとみんはなは川は

遠村秋夕

あまのつとくしとくつらうはなは川は

秋窓

とくしとくつとくはなは川は

国々秋

あつとくげふあふの秋は花なりお花の時あふ

秋花月

麻代あふりいふあふ山田はあふ秋あふ月あふ

閑山月

秋あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

松高月

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

思竹月

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

昔酒月

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

多しな虫

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

水はあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

冬

あふ

初冬

秋三月時多しきよりふりて人々をたねたり

同病後集

あつたあふふふ我言はふふふふふふふふふふ

秋三月時多

秋三月時多しきよりふりて人々をたねたり

あつたあふふふ

あつたあふふふふふふふふふふふふふふふふ

冬里月

冬里月あつたあふふふふふふふふふふふふふふ

秋後集

と論乃山秋後集あつたあふふふふふふふふふふ

冬里月

冬里月あつたあふふふふふふふふふふふふふふ

海を過る

海を過るあつたあふふふふふふふふふふふふふふ

岸より

岸よりあつたあふふふふふふふふふふふふふふ

浜水

浜水あつたあふふふふふふふふふふふふふふ

芝を過る

芝を過るあつたあふふふふふふふふふふふふふふ

水海新宮

水海新宮あつたあふふふふふふふふふふふふふふ

冬地宮

下つて氷のわらわつてる雪のふりかたは
成樹の宮

とつてふりかたは雪のふりかたは
成樹の宮

あま

恋

春恋三首

あまのこゝろをわらわつてあふくたのえ
雪のふりかたは雪のふりかたは
いふせんといふてきくわたりあふくたのえ

夏恋二首

衣の地袖の刺れ花の緑のふりかたは
夏川にうきうきあふくたのえ

秋恋三首

秋神のくちしきあふくたのえ
くちしきあふくたのえ
秋神のくちしきあふくたのえ

冬恋二首

水もれさういぬさういぬあふくたのえ
雪のふりかたは雪のふりかたは

寧ろ恋三首

口の恋いさういぬさういぬあふくたのえ
雪のふりかたは雪のふりかたは

あゝ偏りやぬき多し
わたりひらけし
終て
然ん

寄水慈二首

けしきとてさうやうな所をみてもさうよくは見えません
 うさな中よりお忘れあることをおぼしめす

雜

關海亭

志の式を吹く
 古後

古後

吹師より手書にて所長宛に村長より

萬石齋

山ノ下ノ谷ノ中ノ石ノ上ニ坐スル

翁壯猷

福の結小御意老花其乃志々々

山家燈

身ノミツミヨリトモノ山田氏ノカミヤ

古寺松

夕暮のひさと吹きて月影を流る松風

何名道者

山川いく井戸うきうきふたむきむきあけ

海懷舊

次分一也いふれえいしとてさうさうと袖あれ

曉神祇

秋花は、子母の月をくち初云ふは、くち也

秋人散

